

# 他者の存在を意識することで身につく力

## - IT活用による子どもたちの変容 -

石川県金沢市立大野町小学校 教諭 辻 和 久

### 1. はじめに

今の子どもたちは、自己中心的で、仲間とうまくかかわれない、ある特定の友だちとしか、かかわり合いを持ってない子が多くなったと言われている。四月頃の本校の5年生の子たちにも同じようなことが言えた。

その子どもたちが、「Web学級日誌」「わいわいレコーダー」などのITを活用していく中で、いろんな相手（他者）の存在を意識し、徐々に心をひらきはじめ、学びの世界をひろげていったこの一年間をふりかえってみたい。



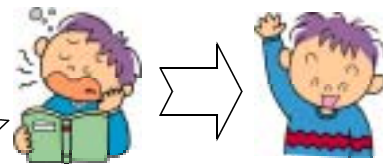
みんなと楽しみながら日誌を書く

### 2. 身につく力 - 表現する力 -

人前で説明したり、思ったことを話すことは苦手という子は多い。（大人でも同様だ）それが、ITを中に通すだけで、積極的になることはしばしばである。さらに、その向こうに見てくれている相手（他者）がいることを意識することで、積極性だけでなく、表現する力もぐんと高まってくるのである。下の例で言うと、始めの頃は単なる「楽しかったです」「おいしかったです」が、相手意識後は「みんなに・・・」「友だちが・・・」が挟まれ、文章に深まりが出てきている。

#### 年度始めの学級日誌と日記

給食がおいしかったです。  
楽しかったです。  
  
勝つてもうれしくもありませんでした。



#### 相手意識後の学級日誌と日記

今日のおかずは、たくわんでした。  
みんなにすごく人気があって、ぼくもとてもおいしかったです。  
  
なんで「おかず」にしたかいうと、友だちが「おかず」がいいと言ってくれたからです。

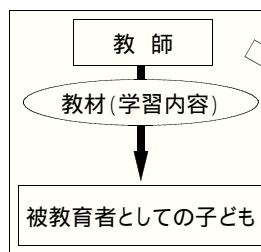
### 3. 新しい学習観への転換へ

右図のように、従来は、教師が子どもたちに、教材を教え込む図式が成立していて、価値として学習内容は、教材の中にあり、教師は如何に効率的に教材を伝達する込むかが大切であるとされてきた。しかし、学習材にひたし込んだり、没頭したりするなど、それ自体の楽しさを味わうことの説明が、従来からある学習観だけではできにくくなったのも事実である。

つまり、ここでの学習内容は、図1右のように自分と学習材や他者との相互性の中にあり、学習内容は「学んでいること」のように関係的にとらえられるのである。

### 新しい学習観への転換

これまであった学習観



### 新しい学習観

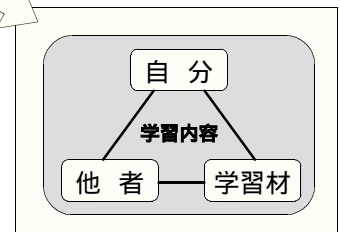


図1 新しい学習観への転換 説明

### 4. IT活用による実際

図2のように、自分と他者との関係、自分と学習材との関係に「IT」を挟むことで、具体的にどのような場が、新しい学習観への転換であったと解釈できるか見てみる。

社会や理科などにおいて、明確な課題に対し、調べてからまとめるまでを通して行う授業設計は、よく行われている。しかし、その大半が、個人のものであったり、それが教師側の評価のためでしかないなど、全体に返されないことが多かった。しかし、「バーチャル模造紙わいわいレコーダー」(図3)を利用した環境学習单元において、クラス全体が同じテーマ(方向性)に向かって学習し、いろいろな考えや調べた結果などが、リアルタイムにディスプレイに映し出される(相手意識も相当あり!)。この画面は、世界でたった一つしか存在しない協働の営みの足跡であり、今こう学んでいることこそが、関係論からみた学習内容であると解釈できる。自分と他者を環境(学習材)とで構成される学習内容に一人ひとりが意味や価値を見だし、より学びを深めていくことが、これからは大切にしていかななくてはならない子どもの側から見た学習観ではないだろうか。現に子どもたちは、友だちの書き方の工夫を真似したり、調べ方を選択するなど、「一人では生まれない学び」を自然と獲得しているのである。

学級日誌も一人で記載することが一般的だが、ITを活用した「Web学級日誌」(図4)上で、バラバラなはずの日誌が、画像を取り込む部分で、「しりとり」などで、前後のかかわりを求められる。ここにも他者の存在を意識した「一人では生まれない学び」がある。

5. 身につく力 - 他者とかがわかること -

普段の生活や学習の場で、他者の存在を絶えず意識させ、子どもの側に立った新しい学習観にシフトしていく実践を重ねることで、これまでバラバラだった学級にある種のまとまりがでてくる。(現段階では、まとまりという抽象概念でしか説明できないが) つまり、この実践は、授業づくりに有効なだけでなく、学級づくりにも効果があることを示している。

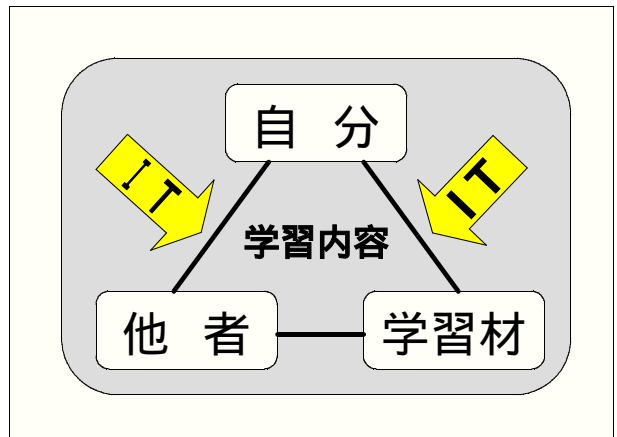


図2 ITの活用



図3 わいわいレコーダーによる学び



図4 Web学級日誌による学び

5. 子どもたちの変容から大人たちの変容へ

これまで、他者の存在を絶えず意識させ、関係的にとらえられる学習内容に価値をおく新しい学習観から子どもたちや学級の変容について、大まかに述べてきた。しかし、一番の変容を求められているのは、我々教師自身かもしれない。子どもに身につけさせたい学力ばかりに目がいき、当の子どもたちから遠くかけ離れた学力になっていないだろうか。ほんの少し、関係的に学習内容をとらえるだけで、我々自身の学びの世界もずいぶん広がることを確信した一年間だった。